

澁谷内閣審議官による記者ブリーフィングの概要

日時：平成27年3月16日（月）18：15～18：45

場所：内閣府

【冒頭発言】

ハワイでのTPP首席交渉官会合は、現地時間15日午後6時前に終了した。週末を挟んだ関係で、13日（金）から最終日までの分をまとめて報告する。

13日（金）の午前中は、バイや少数国での協議を行った。昼は、鶴岡首席交渉官は、4か国の首席交渉官とバイの協議を行った。特定のテーマでなく、全体の話を取った。

午後は、繊維と原産地規則を扱い、投資まで予定していたが、結局原産地規則を夜まで行った。繊維は、元々、特定の国同士の話が多く、まだ懸案がいくつか残っているが、特定の国同士の話なので、調整中という報告があった。この日の原産地規則は、かなりの時間をPSR（個別品目ごとのルール）ではなく、一般規定であるテキストの議論に充てた。最近、原産地規則の議論では、PSRの方はそれなりに粛々と進んでいるが、こちらを固めていくと、ある国にとって、そこで心配事がある場合に、その心配事を一般規定で手当してほしいと考え、テキストにあれを入れたい、これを入れたいという意見が出るようになった。これは、時間稼ぎではなく、心配事があって言っているのだから、そういう提案の一つ一つについて、何が心配なのか全体で確認し、手当の仕方を考え、テキストをできるだけハワイ会合で片付けようと、丁寧なプロセスを経て整理した。原産地規則は物品貿易の裏番組なので、これとの絡みで残るものはあるが、それ以外の一般的な話はおおむね、ハワイ会合で方向性が整理されることになったと思う。

その後、鶴岡首席交渉官は、1か国の首席交渉官とバイ協議を行った。

14日（土）の午前中は、まずテクニカルな論点を扱った。分野でいうと、マーケットアクセスと原産地規則の両方にまたがるような話があり、テキストに書く規律というよりは、決め事のような話について、協定をまとめるまでには一度整理しないといけないという案件がずっと残っていた。それをそろそろ整理することになり、これまで少数国で詰めていたが、平場で議論することになり、この時間に議論をした。これは、どこかの国が損をしたり得をしたりという話でなく、実務的に決めておかないと現場が混乱するというたぐいの話である。

次に投資の議論を行った。投資の章は、ISDSがあるので、最終的には閣僚レベルに上げて決めるという形をとるかもしれないが、そうだとすると、実質的にできるだけ首席交渉官レベルで解決策の提示をしようとワーキンググループで精力的に調整を行ってきた。この日も、これも時間稼ぎではなく、国内法との関係で整理が必要とかいう事情により意見を言っている国があり、原産地規則と同様に、各国の心配事を一つ一つ丁寧に聞いて、調整案を検討した。それを首席交渉官が指導し、あと1日ワーキンググループで調整し、投資については、ランディングゾーンを固めて各国が持ち帰り、国内調整のプロセスに入るべしという指示があった。

次に国有企業。このワーキンググループの雰囲気は悪くなく、課題は残っているが、粛々と調整が続けているという状況である。テキストはかなり論点が片付いたと初日に説明したが、その段階では、片手では足りないくらいの数の課題が残っていたが、ハワイ会合中に半分くらいに減らせたのではないかと思う。残っている論点も、実務的な懸念から出ているものが多く、最終日までのあと1日でできるだけ調整し、なるべく国内プロセスに持ち込むようにとの指示があった。附属書レベルの議論は、まず各国が出してきたリストを、物品交渉におけるオファーのように捉えて、それに対して、各国がリストに残す理由を問いただすという、オファー・リクエストのやり方で効率的に行っている。リクエストも事前に調整して数か国が連名で出すという工夫もし、ハワイ会合ではワーキンググループを精力的に行った。ワーキンググループは、首席交渉官会合に諮るまえに全体会合を行い、それぞれの国に対する各国のリクエストを確認し、登録するというプロセスを丁寧にこなした。リクエストを受けた国は、それぞれ国に持ち帰り、国内調整をすることになった。

この日は盛りだくさんで、最後に知的財産の議論をした。まずは閣僚に上げないで整理したい課題について議論した。一つ一つの論点が、どこの国とどこの国が対立しているか明確になるように細分化されているので、数としては残っているが、各論点については関係国が特定されているので、理論上は、関係国でお互いバイや少数国で調整すれば、時間をかければ終わるはずではある。だが、テクニカルに難しいというのもあり、また、そうでないものも、お互いに立場は分かっているが、例えば他の問題、医薬品の問題がまだ決着してないから、または、知的財産以外の分野で取りたいものが取れないから降りないのだ、というようなものもある。知的財産が難航しているから全体が終わらないのか、全体が終わらないから知的財産が難航しているのか、関係が非常に難しいが、やはり、これだけ多くの分野を扱う交渉なので、終盤になると、そういうところが出てくるということだと思う。

鶴岡首席交渉官は、この日、3か国とバイの協議を行っている。

15日（日）の最終日は、前日の知的財産で閣僚に上げないで整理するものを扱ったが、閣僚マターと思われる課題について議論した。結論から言うと、まだ各国の立場にかなりの開きがあり、いきなり閣僚には上げられないという感じである。最終日は、知的財産の閣僚案件の後、国有企業、投資、前日に議論した実務的な話について、ワーキンググループで今後どういう調整をするか、基本的には国内プロセスということだと思うが、そういう報告を受けた後、去年の北京の後から作成している宿題リストを一つ一つ確認して終了した。

大江首席交渉官代理は、13日以降、米国以外の3か国と協議した。

全体としては、一定の進展があったが、まだ難しい課題が残っているというのがハワイ会合の総括である。まだ開きが大きい課題が残っているので、このまま直ちに閣僚レベルの協議に移るというよりは、交渉官レベルや首席交渉官レベルで調整する必要があるということである。今後の日程は、これからの調整であり、全く未定である。一部、米国の通商専門紙で、閣僚会合の日程に関する記事が出ているが、よく読むと、いずれも憶測であり、去年もAPECの閣僚会合の後にシンガポールで閣僚会合を行ったところからの類推である。事実としては、まだ調整がなされていない状況である。

米国の通商専門紙を読むと、ハワイ会合を「more relaxed atmosphere」として
いる記事があるが、現地の日本の交渉団に聞くと、我が国の受け止めかも知れない
が、特に最後の3日間は、これまでのどの首席交渉官会合よりも真剣に議論が
行われているというのが感想。今まで議論してきた課題だけでなく、ご説明した
ように、いつかは議論しないとずっと思いながらこれまで全く整理されて
こなかった実務的な課題も含めて、真剣に、かつ、まずは少数国で論点整理をし、
その後平場で説明するというプロセスをかなり丁寧に行ったということだと思
う。そういう意味では、大詰めらしい議論がされたと思う。

【質疑応答】

(記者)

国有企業のワーキンググループを行ったというが、どこまで進んだのか。

(澁谷審議官)

片付いたとは言えないが、テキストについては、また全員が集まって一から議論
しないといけないという感じではなく、方向性についてそれぞれの国が持ち帰ると
いうことだと思。附属書レベルについては、オファー・リクエストの世界なので、
もう一度関係国で突き合わせる必要があるが、いずれにせよ、今回かなり丁寧な
プロセスを経たので、まずはそれを踏まえた国内プロセス、ということだと思。

(記者)

まだ隔たりが残っているものがあり、直ちに閣僚という訳にもいかないという話
だが、首席交渉官が全員集まらなくてもいいという可能性もあるのか。

(澁谷審議官)

次の会合をどうするかについては、いまの国有企業や投資、知財など、持ち
帰って、国内調整のプロセスを経るのがまず先で、その様子を見ながら、調整して
いくということ。

(記者)

結局、首席交渉官会合の平場では何分野扱ったのか。

(澁谷審議官)

細かい実務的な議論もあったが、大きなものとしては知的財産、国有企業、環境、
投資、物品貿易、法的・制度的事項、原産地規則（繊維含む）の7分野。

(記者)

国有企業は、閣僚レベルに上げる案件があるという前提での議論か。

(澁谷審議官)

閣僚に上げる必要があるという思いでやっていると思う。ただ、閣僚に上げる
にもレベルがあり、そもそも閣僚会議で判断してもらう必要があるものと、その
前に事務的にほぼ決着しているが、各国に与える影響が大きいので、閣僚で
ひととおり議論してから決める形にするものの2種類あるが、国有企業がどちらか
は、今後の調整次第。

(記者)

国有企業の附属書レベルの議論はまだ多く残っているのか。

(澁谷審議官)

粛々と進めている。時間かかっているが、丁寧なプロセスを経ている。

(記者)

課題が一番残っているのは知的財産か。

(澁谷審議官)

国有企業もボリュームや与える影響度合いもからするとそうかも知れないが、丁寧なプロセスを経ている、このプロセスを進めていけばいつかは、と言う感じ。知的財産は、以前のように、難しくて先が読めない、本当に終わるのだろうか、という感じではなくなっているが、論点の多さと、各国のこだわりの強さから、全体が終わるときでないと終わらない、ということではないか。

(記者)

TPAをにらみながらの動きや話は出ていないのか。

(澁谷審議官)

各論の議論で、TPAがないから云々ということはない。

(記者)

マーケットアクセスで結論が出ていないから降りられないというのは、引いた目で見れば、TPAの見通しが立っていない中では決められないということではないのか。

(澁谷審議官)

そういうのではなく、国内に説明するとき、ルール面で譲歩するような立場の国は、マーケットアクセスで取れるものが取れたから、全体としてバランスが取れて、得るものがあつたという説明をしたいということではないか。全体の説明をする時のことを考えながら交渉しているということではないか。

(記者)

知的財産は、閣僚レベルに向けて間合いを詰める作業に関しても進展が乏しかったという評価か。

(澁谷審議官)

知的財産にずっと関わってきている現場の交渉官にとっては、以前と比べれば進んだということだと思う。が、事実としては、かなりの数の課題が残っている。

(記者)

知財のうち、我々が知っている主な論点のなかで、かなり進展したと評価できるものは何かあつたか。

(澁谷審議官)

細かいものは別として、大きな論点ということであれば、これが片付いたというのではないかもしれない。しかし、全く手付かずで残されているかということ、必ず

しもそうではなく、知的財産は、どの国にとっても重要なインパクトのある問題だからこそ、最後まで終わったという形をとれないということもあるのではないか。課題が残っているから進んでいない訳ではなく、それなりに論点が整理されており、反対が留保になった、というのも進展と言えるのではないか。

(記者)

一定の進展というが、元々ハワイ会合で進むことを目指していた目標よりも進展はなかったということか。

(澁谷審議官)

今までの首席交渉官会合も、「すぐに閣僚会合を開ける状態にまで持っていき、閣僚案件以外は全て片付けよう」と言って始めて、結果は必ずしもそうになっていないわけなので、ハワイ会合が特に進展しなかったということではない。今まで取り上げなかったものも取り上げている他、各分野でプロセスをかなり丁寧にやるような努力も見られるので、終盤に向けた工夫が随分見られたと思う。

(記者)

今後は、調整状況によっては、閣僚会合とは独立した首席交渉官会合を開かなくてよい可能性もあるのか。

(澁谷審議官)

知的財産は課題が多く残っているが、それはそれとして、それ以外の分野について、どの程度国内調整が進むのか、その結果、今回のように分野ごとの交渉団が全員で集まらないといけない状況にまだなっているのかによる。状況を見ないと何とも言えない。

(記者)

知的財産のみで首席交渉官が集まることはあるか。

(澁谷審議官)

知的財産はテクニカルな話が多いので、まずはワーキンググループとして、どのように調整するかということではないか。

(記者)

会合終了後も鶴岡首席交渉官はハワイに残るようだが、何をするのか。

(澁谷審議官)

残っている首席交渉官がいれば協議を模索するのではないか。

(以上)